

成立前の松江周辺の自然環境と人々の暮らし(竹広助手)。受講者10名。

1997年(平成9年)

1月10日 第4回山陰地域・汽水域研究発表会 延べ55名参加のもとで19題の研究が発表された。



写真4. 第4回山陰地域研究・汽水域研究発表会(1997年1月10日)

2月8日 第3回鳥根大学・鳥取大学合同シンポジウム「山陰地方の現状と課題ーバイオサイエンスの今日と明日ー」を鳥取大学地域共同研究センター・遺伝子実験施設、鳥根大学地域共同研究センター・遺伝子実験施設とともに主催(於鳥取大学医学部記念講堂)

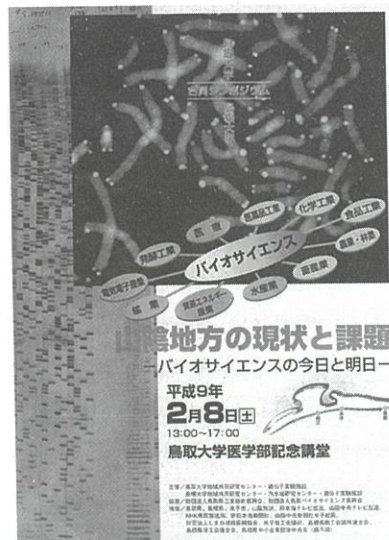


写真5. 合同シンポジウムのポスター

文部省科学研究費の交付

平成8年度科学研究費補助金

基盤研究(A)「海跡湖堆積物から見た汽水域の環境変化ーその地域性と一般性ー」(継続,研究代表者:高安克己)  
 基盤研究(A)「山陰汽水域の自然史と文化史」(継続,研究代表者:徳岡隆夫)

地方公共団体,民間企業等との受託研究および共同研究,奨学寄付金等

1996年(平成8年度)

受託研究

鳥根県教育委員会「朝酌川改修に伴う発掘調査ほか鳥根県内遺跡発掘調査の調査指導」(継続,研究担当者:徳岡隆夫,高安克己,竹広文明)  
 鳥根県古代文化センター「風土記調査」(継続,研究担当者:高安克己)  
 通産省工業技術院地質調査所「富栄養化湖沼における食物連鎖を利用した水質浄化技術に関する研究」(継続,研究担当者:高安克己,國井秀伸)  
 匹見町教育委員会「鳥根県美濃郡匹見町田中ノ尻遺跡発掘調査の調査指導」(継続,研究担当者:竹広文明)  
 米子市「米子市史編纂事業」(継続,研究担当者:竹広文明)

共同研究

山陰建設(株)「シジミの生育とその環境に関する調査」(研究代表者:國井秀伸)

奨学寄付金等

芙蓉海洋開発(株)「汽水湖の底質改善に関わる基礎的研究」(研究代表者:高安克己)  
 日本自然保護協会「中海本庄工区の種多様性に関する調査」(研究代表者:國井秀伸)

平成9年度 汽水域研究センター研究員・客員研究員

汽水域研究センター研究員(学部・課題別)一覧表

(平成9年2月17日現在)

法文学部(研究員 14名)

職名	氏名	研究課題
教授	鬼頭 宏一	湖沼水質保全条例をめぐる問題
〃	岡崎 勝彦	地方自治行政と法的諸問題
〃	杉元 邦太郎	山陰地方諸地域の存立基盤
〃	田中 義昭	山陰地方における原始・古代集落の研究
〃	喜多 村正	出雲地域における民俗と地域性
〃	松尾 壽	近世山陰地域の研究 *
〃	竹永 三男	宍道湖・中海沿岸地域の社会文化環境に関する歴史的研究
〃	酒井 董美	山陰地方の口承文芸
〃	蘆田 耕一	神社奉納和歌集の研究
〃	水内 透	森 鷗外研究 *
助教授	堤 研二	山陰地域の地域特性の研究
〃	田中 則雄	山陰地方藩政時代における文学・思想
〃	金山 富美	日仏(欧)文化交流
助手	会下 和宏	山陰低湿地遺跡の研究

教育学部(研究員 10名)

職名	氏名	研究課題
教授	三保 忠夫	「鳥根県内農具図解」の研究
〃	林 正久	中国地方のテフラと地形発達
〃	坂本 一光	自然環境教育において水を主題とする意義
〃	山本 眞一	汽水域の生活経済
〃	銭本 健二	ラフカディオ・ハーン研究意義
助教授	山崎 亮	山陰地方の「民間信仰」研究
〃	野村 律夫	中型ベントスの生態・古生態および中海・宍道湖の環境解析
〃	大谷 修司	宍道湖・中海の藻類プランクトンの分類学的研究
〃	新井 映子	微量金属元素給源としてのシジミ貝殻利用技術の開発
講師	角 替敏昭	山陰地域の高温低圧型変成岩の成因について

総合理工学部(研究員 9名)

職名	氏名	研究課題
教授	山内 靖喜	宍道湖・中海周辺の中新世以降の構造運動
〃	高須 晃	汽水域基盤構成岩石の研究
〃	赤坂 正秀	山陰グリーンタフ地域における金属鉱床
助教授	小室 裕明	中海・宍道湖周辺の火山活動
〃	亀井 健史	汽水域における地盤工学的特性の解明に関する研究
〃	中山 勝博	汽水湖に流入する河川の堆積過程及びその堆積物の層序
講師	三瓶 良和	中海・宍道湖の環境変遷に関する研究
助手	大平 寛人	非海成堆積盆の熱履歴評価
〃	瀬戸 浩二	宍道湖・中海における底生有孔虫の研究

生物資源科学部(研究員 28名)

職名	氏名	研究課題
教授	宮田逸夫	山陰地方の植生 *
〃	山本廣基	土壤生態系における農薬の環境影響評価
〃	相崎守弘	湖沼の流域管理と水質改善手法に関する研究
〃	片桐成夫	斐伊川流域の森林の物質循環に関する研究
〃	若月利之	汽水湖の水質・底質と集水域の土壌特性
〃	井口隆史	過疎・高齢化と中山間地域振興
助教授	澤眞知子	汽水域における種分化機構の研究
〃	金子信博	土壤生態系における種間相互作用
〃	小池浩一郎	斐伊川水系の森林統合情報システム
〃	猪股 趣	農産物の生産と流通に関する研究 *
〃	渡部晴基	農山村過疎地域における地域産業複合化に関する研究
〃	伊藤勝久	源流域地域における農林業生産の社会及び自然環境に対する影響
〃	梶村光男	日本海南西部に於ける海藻の分類学的ならびに生物地理学的研究
〃	新村義昭	山地小流域における森林水文条件の研究
〃	藤居良夫	山陰地域における環境の予測と評価に関する研究
〃	星川和夫	水生昆虫の塩分耐性
講師	小池文人	汽水域における生物群集の研究
〃	秋葉道宏	ヨシ湿地の創出技術に関する研究
〃	佐藤利夫	汽水・海水圏における微生物相の変動について
〃	宇津田嘉弘	汽水域における野鳥等の生息実態とその特性について
〃	大森賢一	地域経済のモデル化とシミュレーション
〃	武田郁郎	集水域における水質水文環境
〃	杉村喜則	山陰地方の植生と植物相についての研究
助手	高島育雄	河川・汽水域における魚類行動
〃	巢山弘介	汽水域における微生物の生態
〃	山本伸幸	森林の適切な利用・管理のための統計システムの確立
〃	鹿取悦子	斐伊川流域における資源管理と農山村経営に関する研究
〃	山下多聞	島根県地方における森林資源の保全に関する研究

合計 61名

任期：平成10年3月31日

(注)研究課題中に\*印がある者の任期は平成9年3月31日まで

汽水域研究センター客員研究員一覧表

平成9年3月17日現在

氏名	所属	共同研究のテーマ(推薦者)
赤木三郎	鳥取大学教育学部教授	湖山池の自然環境学術調査(高安克己)
赤澤秀則	鹿島町教育委員会主任主事	汽水域の考古学的研究(竹廣文明)
安間 恵	川崎地質(株)海洋調査部長	中海・宍道湖の音波探査法の開発(徳岡隆夫)
生嶋 功	なし	水辺の景観に果たす水生植物の役割(國井秀伸)
井内美郎	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部主任研究官	中海・宍道湖の形成史の研究(徳岡隆夫)
岩熊敏夫	総理府国立環境研究所生物圏環境部長	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
沖野外輝夫	信州大学理学部教授(理学部付属諏訪臨湖実験所長)	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
尾原和夫	島根県立大社高等学校教諭	宍道湖・中海集水域の昆虫群集による環境評価(星川和夫)
景山初美	なし	汽水域に於ける野鳥等の生息実態とその特性について(宇津田嘉弘)
鹿島 薫	九州大学理学部助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)
勝部 昭	島根県教育庁文化財課長	山陰の低湿地遺跡の研究(徳岡隆夫)
神谷 要	(財)中海水鳥国際交流基金財団指導員	汽水域の水生物相(國井秀伸)
公文富士夫	信州大学理学部地質学科助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)
越川敏樹	安来市立南小学校教頭	宍道湖・中海の水生物相及び生態(國井秀伸)
小林巖雄	新潟大学理学部地球鉱物学科教授	汽水棲貝類の生態と殻形成との関係について(高安克己)
西条八束	なし	汽水域の生態系に及ぼす人為的改変の影響(國井秀伸)
西城 繁	宮城教育大学助教授	新生代後期の気候変動と海面変化(高安克己)
斎藤文紀	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部主任研究官	中海・宍道湖の形成史の研究(徳岡隆夫)
坂之上 一	なし	中海・宍道湖周辺域の古環境変遷(高安克己)
坂本 巖	島根医科大学医学部助教授	ヤマトシジミの生態学的研究(高安克己)
貞方 昇	北海道教育大学教育学部函館分校教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)
佐藤仁志	島根県立三瓶自然館指導課長	汽水域に於ける野鳥等の生息実態とその特性について(宇津田嘉弘)
須崎 聡	千本電気(株)技術開発部取締役	中海・宍道湖の音波探査法の開発(徳岡隆夫)
田崎和江	金沢大学大学院自然科学研究科教授	水圏における微生物による自浄作用の研究(飯泉滋)
田中里志	京都教育大学助手	新生代後期の気候変動と海面変化(高安克己)
田中善蔵	なし	湖山池の自然環境学術調査(高安克己)
田中隆二	広島市立大学国際学部教授	日仏(欧)文化交流(金山富美)
土谷 岳 令	千葉大学理学部助手	水辺の景観に果たす水生植物の役割(國井秀伸)
中尾 繁	北海道大学水産学部教授	塩分傾斜に伴う動物相の変化(高安克己)
中島拓男	滋賀県琵琶湖研究所総括研究員	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
中村幹雄	島根県水産試験場三刀屋内水面分場長	中海・宍道湖の生態学的研究(高安克己)
中本忠信	信州大学繊維部教授	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
新妻信明	静岡大学理学部地球科学科教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)
西尾克己	島根県教育庁文化財課主幹	山陰の低湿地遺跡の研究(徳岡隆夫)
西田良平	鳥取大学工学部教授	湖山池の自然環境学術調査(高安克己)
西村清和	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部主任研究官	中海・宍道湖の音波探査法の開発(徳岡隆夫)
野津和功	鳥取女子短期大学助教授	中山間地域の現状と振興方策に関する実証的研究(井口隆史)
野原精一	総理府国立環境研究所生態機構研究室主任研究員	水辺の景観に果たす水生植物の役割(國井秀伸)
服部 旦	大妻女子大学文学部教授	『出雲国風土記』島根半島部(島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡)における海浜・淡水域・汽水域水系の研究(蘆田耕一)
浜田周作	なし	異常気象と堆積作用の関連(山内靖喜)
平井幸弘	愛媛大学教育学部助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)

氏名	所属	共同研究のテーマ(推薦者)
平野芳英	島根県立八雲立つ風王記の丘資料館管理課学芸主任	汽水域の考古学的研究(竹廣文明)
廣邊真澄	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部研究員	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
福沢仁之	東京都立大学理学部助教授	汽水湖体積物の高精度分析(高安克己)
福原晴夫	新潟大学教育学部教授	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
古山勝彦	大阪市立大学理学部助教授	中国・山陰地域の第四紀玄武岩類の地質学・岩石学的研究(高須晃)
益田芳樹	川崎医科大学講師	汽水カイメン(宍道湖・中海に生息するカイメン)の生活史に関する研究(松野 嶺)
松井整司	なし	山陰地域の火山活動史(山内靖喜)
松井章	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官	汽水域における環境変化と人間活動史の研究(竹廣文明)
松本英二	名古屋大学大気水圏科学研究所教授	汽水湖の形成と環境変化(徳岡隆夫)
箕浦幸治	東北大学大学院理学研究科教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究(高安克己)
宮田雄一郎	山口大学理学部助教授	中海、飯梨川河口のマッドランプ(徳岡隆夫)
森忠洋	なし	生物による水質浄化システムの構築(國井秀伸)
山内克典	岐阜大学教育学部教授	長良川における塩水遡上と汽水域生態系の研究(徳岡隆夫)
山口佳昭	信州大学理学部地質学科教授	山陰地域の金属鉱床の構成鉱物と鉱化作用(赤坂正秀)
吉川周作	大阪市立大学理学部助教授	完新統の火山灰層序(中山勝博)
淀江賢一郎	財団法人島根県民会館主幹	汽水域の水生昆虫の分布・生態に関する研究(高安克己)
渡邊正己	川崎地質(株)関西支社微化石分析所課長	汽水域沿岸遺跡の古環境復元(高安克己)

以上58名

## 編集後記

今年度も無事にLAGUNA(汽水域研究)の第4号を発行することができました。いつもながら年度末のあわただしい作業でした。このため、期日の限られた校正作業など、投稿された皆様にはご迷惑をおかけしました。ここに改めて皆様のご協力に感謝いたします。

さて、第3号は盛り沢山の内容でしたが、本号は通常のボリュームに戻っています。体裁はほぼ統一されてきましたが、まだ論文ごとに異なる体裁も残っています。次号からは編集委員のうえに編集顧問を置き、さらに充実した雑誌にする予定です。皆様のさらなるご協力お願い申し上げます。

## LAGUNA(汽水域研究)

### 編集要項

- LAGUNA(汽水域研究)は、島根大学汽水域研究センターにおいて、年1回発行する。
- 本誌には、本センターの専任研究部門と共同研究部門の教官、研究員、客員研究員、および編集委員会が特に認めた者が投稿することができる。
- 編集委員には本センターの専任教官があたる。
- 本誌の内容は、原著論文(original article)、短報(short note)、資料・解説(review)など、広く汽水域に関わるもの、および本センターの活動に関わるものとする。
- 執筆者は次項の執筆要項に従うものとする。
- 投稿原稿の掲載の可否については、関連する研究者の査読を経た後に、編集委員会が決定する。
- 別刷は50部を本センターの経費から負担する。

### 執筆要項

- 投稿原稿の本文の用語は日本語または英語とする。原稿の長さについては特に規定しないが、大部の場合は編集委員が縮小を要求する場合もある。
- 原稿はできるだけワープロを使用することとする。その場合、1行23文字(半角46字)、1ページ23行、上下左右のマージンを2.5cm以上空けること。句読点は“,”と“.”を用いること。また、文字指定はプリントアウトした原稿に行い、ワープロ原稿には特殊文字を用いないこと。  
手書き原稿の場合は、400字詰めA4版横書き原稿用紙を用いること。  
なお、刷り上がり1ページは、横書き1行23字、46行の2段組(約2,100字)を基本とする。
- 数字はアラビア数字、生物和名はカタカナを用い、学名はイタリック指定のこと。時間、濃度、速度などを表す場合には、SI単位を用いること。
- 本文中での文献の引用は次の例に従う。また、3名以上のものについては、「・・ほか」または「・・et al.」とする。  
・・・山田・松井(1993)は宍道湖・中海の魚類について・・・。  
・・・and Avise et al. (1987) speculate that this may have arisen from・・・。  
・・・植物生態学分野について記述している(吉田, 1992; 佐藤, 1993)。
- 報文の構成は以下の通りとする。  
日本語原稿の場合: 表題, 著者名・所属, 英文表題, 英文著者名・所属, 英文摘要(Abstract, 200語以内程度), 英文キーワード(アルファベット順に5語以内), 本文, 謝辞, 引用文献。  
英語原稿の場合: 表題, 著者名・所属, 日本語表題, 日本語摘要, キーワード, 本文, 謝辞, 引用文献。  
原稿の第1枚目は表紙とし、その上半部には表題から英文所属までを書く。原稿第2枚目には摘要とキーワードを書き、本文は第3枚目から始める。表紙を含め、通しページ番号を打つこと。